

第7章 共和国の夜明け

ダーウッド・ハーンの構想と課題

私的な背景を述べるならば、私がこの記録を書いている今日——2025年7月17日——は、アフガニスタンにおける王制の崩壊からすでに半世紀以上が過ぎている。私はダーウッド・ハーン大統領とともにクーデターに直接関与した空軍士官であり、王制崩壊へと至った出来事について、自らの見解と洞察を共有するにはふさわしい時期だと感じている。

ソ連とアフガニスタン軍士官候補生

1953年から1963年までの10年間にわたるダーウッド・ハーンの首相在任期間中、アフガニスタン政府は軍事力の強化とアメリカ合衆国との経済協力の推進を目指した。しかし、アメリカはパキスタンへの戦略的関与を優先していたため、必要な支援を提供することに消極的であり、これらの努力は成果を上げなかった。結果として、アフガニスタンは他の超大国であるソビエト連邦に援助を求めざるを得なかった。こうして両国の関係は転換し、1959年に「包括的協力協定」が締結された。この協定により、教育交流が大幅に拡大し、1989年までにソ連の教育機関で106の専門分野にわたり6万人以上のアフガニスタン人学生が卒業した。その中でも特に軍事教育に重点が置かれていた。

私自身も1964年、旧ソ連における軍用航空工学の高等教育を受けるため、政府奨学金を得た百名余りの学生団の一員であった。私たちのグループはキーウ（旧キエフ）航空軍事アカデミーに通っていた。

軍事学生としての私たちは、祖国の政治的動向に強い影響を受け、自らの同僚将校たちの間に政治的自覚を広めようと努めるようになった。1965年にアフガニスタンで政党活動が活発化したことは、海外に留学していた学生たちにも影響を及ぼし、私たちはその後、軍将校による最初の小規模なグループを結成した。1969年に卒業を迎える頃には、私たちは社会民主主義的思想、祖国への愛国心、そして国家に対する責任感に満ちた一体的な軍事学生集団へと発展していた。私たちはいかなる政党や派閥にも属することを避け、もっぱら国民の利益を守ることにのみ忠実であった。

危機の激化

前章で述べたように、1970年代初頭のアフガニスタンでは政治情勢が悪化し、広範なデモ

や衝突を抑えきれず、環境問題による災害にも対処できないまま、次々と政権が崩壊していった。

この混乱のさなか、当然のことながら次に浮かび上がった主要な問いは、「この混乱をいかにして効果的に収束させることができるのか」というものであった。議論の焦点は、従来の議会中心の政治体制に依拠すべきか、それとも勢いを増していた新興の政党勢力に依拠すべきか、という点に置かれた。

変革への前奏

王政を打倒するクーデターでダーウッド・ハーンに加わった若き軍将校のひとりとして、当時の自らの決断を振り返ると、私の動機は祖国の現状に対する深い憂慮に根ざしていたことに気づく。王制はその威厳にもかかわらず、一般の人々の生活を向上させるうえで無能であることを露呈していた。圧倒的多数の国民が苦しむ貧困と、権力を握る富裕層の贅沢な生活とのあまりにも鮮烈な対比は、私たちの社会を蝕む社会的不正義を日々思い起こさせるものであった。

現状を分析した結果、私たちはこの体制が時代遅れで無能であり、変化を受け入れる意志を欠いているとの結論に至った。国民の間には広範な不満が蔓延していた。私たちは政府の脆弱性を正確に理解していたが、当時芽生えつつあった政治組織は、社会に前向きな変化をもたらすほど成熟してはいなかった。さらに政府は、政党法の制定にも依然として消極的であった。

私たちは、王政という枠に縛られた5つの政権が次々に失敗し、国民の切実な問題を解決できずに崩壊していく様を目の当たりにした。この終わりの見えない無能と不平等の連鎖こそが、私たちの変革への情熱を掻き立てたのである。私たちは、権力が一部の特権層に独占されるのではなく、民衆の手に委ねられる体制を切望した。民衆によって、民衆のために統治される共和国という構想は、私たちの指針となり、ついには立ち上がってクーデター運動に加わり、共和国樹立へと至る行動を決意させる原動力となった。

ダーウッド・ハーンとの会談

当時、ダーウッド・ハーンはクーデターの準備のため、軍内部で若い将校を積極的かつ秘密裏に勧誘していた。信頼は極めて重要な要素であり、彼は軍の組織を綿密に探り、適任者を見極めていた。ある日、私はダーウッド・ハーンの親しい側近のひとりから接触を受け、彼に会うよう促された。

私はこの件を空軍内の将校グループに報告した。そのグループはすでに大佐から軍曹に至るまで 150 名を超える規模に拡大していた。当初、私たちは安全上の理由からダーウッド・ハーンの招きを断ったが、事実上の指導者であった私は、彼の意図を見極めるために接触することをグループから正式に許可された。軍組織として、私たちはこの進行中の動きを傍観することはできず、積極的に関与することが不可欠であると認識していた。

私がダーウッド・ハーンと初めて会ったのは 1972 年 8 月のことであった。彼の私室で行われたその会談では、私たちは国内外のさまざまな関心事について直接意見を交わした。この時点で彼はクーデターを企図していることを明確には示唆しなかった。

ダーウッド・ハーンは特に、国軍中央軍団の参謀長であり国王の娘婿でもあるアブドゥル・ワリ皇太子を強く批判していた。彼は前年に催された「ペルシア帝国建国 2500 周年記念式典」において、イランの国王に抗議しなかったことを悔やんでいた。ダーウッド・ハーンは特に、イラン国王がその演説の中で「旧ペルシア帝国の失われた領土の回復」に言及したこと、そしてその中にアフガニスタンが含まれていたことに深い懸念を抱いていた。また、彼はアフガニスタン政府の対パキスタン政策に強い不満を示し、当時の国家の混迷した状況を嘆いていた。

私の会談の報告を受け、空軍将校団の意見はまっぴたつに割れた。半数は、ダーウッド・ハーンがかつて独裁的な政治手法で知られ、第 2 次世界大戦中にナチス・ドイツを支持していたとされる過去を理由に、彼との協力に強く反対した。これに対し、残る半数は、ダーウッド・ハーンが王室と血縁関係にあることを理由に、王政打倒の指導者として最も適任であると主張した。彼らは、王族とのつながりが国家の治安機構からの疑念を払拭し、共和国への円滑な移行を可能にすると論じた。

クーデターの戦略的計画と準備

その後の定期的な会合において、ダーウッド・ハーンは計画中の武装蜂起に際して空軍が地上部隊を支援する重要な役割を果たすことを強調した。彼は、地上作戦に続いて空軍が連帯を示すことが勝利確保において決定的であると考えていた。

私はカーブルとバグラム空軍基地を頻繁に往復し、戦略の調整を行い、パイロット、技術者および整備士と定期的に会合を持った。

ダーウッド・ハーンは時折、クーデター準備のために各軍部隊の努力を調整し、各部隊からの報告を受けるべくカーブルの秘密の場所で内密の会合を開いた。1973 年 5 月のそのよ

うな会合のひとつでは、戦車部隊の混乱と連携不足が明白になり、より統一的な行動計画の必要性が浮き彫りになった。ダーウッド・ハーンは戦車部隊を叱責し、会合は散会した。

次の会談で、私はダーウッド・ハーンに対し、作戦計画の立案と調整を支援するために、空軍将校のより積極的な参加を認めるよう進言した。そして、常に最新の情報を彼に報告することを約束した。彼はこれに同意し、空軍将校の積極的な関与のもとで最終的な作戦計画が策定された。その計画は、王室親衛師団の降伏確保、カーブル主要街道の封鎖、王立軍の主要将軍および軍幹部や閣僚の拘束、通信網の掌握に重点を置くものであった。

その後数週間うちに、王室の治安機構がクーデター計画を察知した。国防大臣は対応に迷い、当時ローマ旅行に随行していた陸軍参謀総長の帰国を待つ決定を下した。この事態を重く見た私たちは、作戦の実施を前倒しする許可をダーウッド・ハーンに求めた。

この文脈において想起すべきは、1941年の「ロガール事件」である。これは第2次世界大戦中、アフガニスタンで行われた失敗に終わった諜報作戦であった。この作戦では、ドイツとイタリアのスパイが当時若き軍人であったダーウッド・ハーンと協力し、英軍に対するパシュトゥーン部族蜂起を扇動しようとした。しかし作戦は発覚し、関与者は処刑された。一方で、ダーウッド・ハーンは王族との血縁関係ゆえに責任を免れ、無傷でこの事件を切り抜けた。この事件は、失敗時においてもダーウッド・ハーンが結果的に免責される能力を有していたことを如実に示していた。

このような歴史的な前例を踏まえ、私たちはクーデターが失敗した場合、ダーウッド・ハーンだけではその責任を免れるであろうことを十分に理解していた。私たちにはそのような特権はなかった。

血を流さない政変

1973年7月17日、蜂起の決行日に、作戦は小さな支障や遅れこそあったものの、おおむね順調に進行した。このクーデターはほとんど抵抗を受けず、死傷者も最小限にとどまる「無血クーデター」であり、全将校が示した卓越した規律と忍耐によって特徴づけられた。

一部の歴史家は、アフガニスタン人だけでこれほど複雑な作戦を実行できたはずがないと主張し、その高度な組織性から外国勢力の関与を示唆している。しかし、私はこのような見解をアフガニスタン人への侮辱と考える。明確にしておかねばならないのは、この計画にはソビエト連邦を含むいかなる外国も関与しておらず、事前にその存在を知っていた者もいなかったということである。ただし、クーデター後、ソ連はその影響力を行使し、さ

まざまな手段によって新政府の基本政策を損なう方向へと導いていった。

クーデターの翌朝早く、私はダーウッド・ハーンの邸宅を訪れ、作戦の経過と市内の情勢について報告した。彼がラジオ・アフガニスタンで放送する演説文を起草しているとき、私は彼の目に喜びの涙が浮かんでいるのを見た。その朝、ラジオ・アフガニスタンを通じて全国に向けて放送されたダーウッド・ハーンの演説は、我々の使命の頂点を示すものであり、同時にアフガニスタンにおける 226 年に及ぶ王制の公式な終焉を告げる瞬間であった。

新共和国の課題

共和国が勝利を祝う中で、間もなく数多くの課題が押し寄せた。作戦後の混乱期において、ダーウッド・ハーンの統率力は極めて重要であった。彼の政治的復権はソ連からも熱烈に歓迎された。ソ連は、ダーウッド・ハーンの新たな地位を利用して、地域における中国およびアメリカ合衆国の影響力を牽制する好機と見なしたのである。

その後の 2 週間、ダーウッド・ハーンは内閣の組織に苦慮し、自身の構想と政策方針に沿った閣僚陣の人選に難航した。彼は政府組織の在り方を協議するため、中央委員会の会合を複数回開催した。

王族拘束のジレンマ

共和国成立初期において、最も重要な課題のひとつは、クーデター当時ローマに滞在していたザーヒル・シャーを除く、カーブルに残る王族の処遇であった。歴史的に、新政権のもとで旧王族が不遇な結末を迎えることは珍しくなく、今回のケースでは、新大統領が王族と血縁関係にあるという事情を考慮し、極めて微妙な均衡を取る必要があった。

ダーウッド・ハーン大統領は、王族の一員であるという立場から、密かに彼らの国外脱出を手配した。この決定は軍内部に深刻な不満を引き起こした。将校たちは、そのような重大な決断が事前に共有されなかったことに強い裏切りを感じた。この緊張は空港で頂点に達し、空軍将校たちが王族の拘束を要求して激昂する中、私はその怒りを鎮め、ダーウッド・ハーン大統領の意向に従って王族のローマへの安全な出発を円滑に進めるよう求められた。

その後の影響は深刻であった。王族の出国が秘密裏に行われたこと、そしてダーウッド・ハーンと王族の血縁関係によるえこひいきの印象が、軍将校団と政府の間に亀裂を生じさせた。

さらに不満は、翌年ダーウッド・ハーンが権力を強化し潜在的な脅威を排除する目的で、私を含む空軍の主要将校 40 名以上を解任したことで一層悪化した。解任された者は全員、自宅軟禁下に置かれた。

王政崩壊後の政治的同盟関係

共和国の樹立以後、ソビエト連邦は政党を通じてアフガニスタンへの影響力を大幅に強化し、その結果、次の 5 年間にわたり深刻な事態を招くこととなった。

この時期、ダーウッド・ハーン大統領は幾度にもわたる反乱と敵対行動に直面した。1973 年 9 月、元首相モハンマド・ハシム・マイワンドワルとその同僚が逮捕され、そのうち 6 名が処刑され、多くが投獄された。イスラーム主義勢力の中では、マウラナー・ファイザーニが処刑され、その支持者たちは拘束され、イスラーム運動の構成員の多くが国外へ逃亡した。

こうした動きにより、近隣諸国はダーウッド・ハーン大統領の政策に懸念を示した。彼の政権はアフガニスタン人民民主党（PDPA）のパルチャム派に大きく依存していたためである。1975 年、国内外、特にイスラーム諸国からの圧力を受け、ダーウッド・ハーン大統領は政府の主要ポストからパルチャム派の人物を排除し、外交政策の転換を図った。

ダーウッド・ハーン大統領とパキスタンの不安定な関係

1975 年初頭、ダーウッド・ハーン大統領はソ連の方針から距離を置き、パキスタンとの関係修復を模索し、同国政府に対して和解の意を示した。この動きの背景には、カーブル訪問中のアブドゥル・ガッファール・ハーンらパシュトゥーン系指導者たちに彼が感じた失望があった。ダーウッド・ハーンは 1953 年から 1963 年の首相在任時にも、カーブルでアブドゥル・ガッファール・ハーンに対し「パシュトゥニスタン亡命政府」の樹立を提案したが、王政下では荒唐無稽なものとして退けられた。共和国成立後、彼は再び同様の提案を持ちかけたが、今回は「共和国はまだ幼子にすぎない」と一蹴された。この冷淡な反応に失望したダーウッド・ハーン大統領は、外交路線へと方針を転換し、パキスタンのズルフィカル・アリー・ブットー首相との相互訪問を実現させ、両国間の緊張緩和を図った。

しかし、ダーウッド・ハーン大統領のパシュトゥニスタン問題に対する不満は、アフガニスタン経済に深刻な影響を及ぼした。1974 年、リビアのムアンマル・カダフィ大佐やエジプトのアンワル・エル＝サダト大統領らの強い要請にもかかわらず、彼はラホールで開催された第 2 回イスラーム首脳会議への出席を拒否した。その代わりに、インド駐在アフガニスタン大使アブドゥル・ラフマン・パズワクに代理出席を命じた。その結果、会議では

大多数の国々がパシュトゥニスタン問題に関するパキスタンの立場を支持し、同国への連帯を表明したため、アフガニスタンはイスラーム諸国の中で一層孤立することとなった。緊張緩和の努力として、ダーウッド・ハーン大統領は1976年6月、パキスタンのズルフィカル・アリー・ブットー首相をアフガニスタンに招き、会談を行った。友好の証として、ブットー首相は収監されていたすべてのパシュトゥーン系指導者を釈放した。これに応じて、ダーウッド・ハーン大統領は元首相であり、当時モスクワ駐在大使を務め、自身の側近でもあったヌール・アフマド・エテマードィをパキスタン大使兼特使として任命した。

1976年6月のブットー首相のアフガニスタン訪問では、両首脳の間で一連の協議が行われ、両国の間に存在する懸案は時間をかけて修復する必要がある、政治的手段によって解決すべきであるとの認識で一致した。

その頃、私はブットー首相の公式訪問中にカーブルでの接遇を担当した元教育相モハンマド・アナス博士と会う機会を得た。博士は訪問後に私へ印象を語り、ブットー首相が会談に大いに満足しており、それを自身の政治経歴の中で最も困難な使命のひとつと見なしていたと述べた。

しかし、こうした両国の努力は1977年7月、パキスタンのズルフィカル・アリー・ブットー首相がジア＝ウル＝ハク将軍によるクーデターで失脚し、その後処刑されたことにより水泡に帰した。この政変は両国関係の正常化に大きな打撃を与え、懸案事項は未解決のまま残された。

1976年、ダーウッド・ハーン大統領は新憲法の起草委員会を設置し、翌1977年3月にロヤ・ジルガ（大国民会議）を招集した。正式な手続きを経て新憲法が承認され、これによりダーウッド・ハーンは大統領に再選され、その権力独占に正式な正統性が与えられた。しかし、内閣の構成には一切の変更が加えられなかった。

1978年初頭、ダーウッド・ハーン大統領は一連の外交活動を展開し、リビア、ユーゴスラビア、インド、パキスタン、クウェート、サウジアラビアを歴訪した。彼は各国から経済支援の約束を取り付けると同時に、共産主義勢力から距離を置くよう強く促された。

第一共和国の終焉

1978年4月、パルチャム派の主要な思想家であったミール・アクバル・ハイバルの暗殺を契機に、政治的緊張は急激に高まった。その後のPDPA（アフガニスタン人民民主党）に

よる大規模なデモと指導者たちの逮捕によって、情勢はさらに悪化した。

1978年4月26日、軍事演習を装った攻撃が開始された。戦車部隊が先頭に立ち、政府の主要施設を包囲した。国防大臣と参謀総長は反撃の指揮をとることができず、最終的に捕らえられた。包囲は20時間続き、空爆が攻撃を一層激化させた。ダーウッド・ハーン大統領は孤立し、反撃の望みも失われていたが、降伏を拒み、殺害された。

空軍のアブドゥル・カディール将軍は、このクーデターにおいて重要な役割を果たしたが、彼がPDPAと関係を持っていなかったことは特筆すべきである。数日後、彼は空軍司令部で私と再会し、誇らしげに挨拶を交わした。彼は将校や関係者を前にして声高に演説し、ダーウッド・ハーン大統領が自らの権力掌握を助けた若い軍将校たちを裏切ったと非難し、大統領の裏切りこそがその失脚の唯一の原因であると強調した。

その後数日のうちに、私はアブドゥル・カディール将軍と何度か会談を重ねた。私は、権力をPDPAの独占に委ねることに強く反対し、代わりに11名以内の将校から成る「軍事革命評議会」を設立することを提案した。この評議会がアフガニスタンの治安を共同で監督し、暫定政府が全ての政治勢力を包含する形で樹立されるまで国家運営を担い、さらに新憲法起草委員会を設けるべきだと主張した。

ソ連の影

アブドゥル・カディール将軍は私の提案を全面的に支持し、今後の主要軍将校との会議でそれを推進すると約束した。しかし、その後の展開はまったく異なるものとなった。ソ連共産党はこの状況を利用してアフガニスタンへの直接的影響力を強化し、ヌール・モハンマド・タラキーとハフィズッラー・アミンを独占的に支援した。事態をさらに複雑にした要因のひとつは、多くの将校たちの間でイデオロギーよりも部族的結びつきが優先されていたことであった。彼らの多くがタラキーおよびアミンと行動を共にしたため、PDPAの立場はいっそう強固なものとなった。

それはアフガニスタンの歴史における極めて重大な瞬間であった。ソ連のカーブル大使館の書記官であり、アフガニスタン公衆衛生省に派遣されていた顧問のソコロフ博士が、私のもとを訪れ、政府形成に関する私個人の見解を尋ねてきた。しかし、後になってそれは真の目的を隠すための名目であり、実際にはモスクワからのメッセージを伝えるためにアブドゥル・カディール将軍との会談を手配する任務であったことが判明した。私はソコロフ博士に対し、もしモスクワがPDPAによる政権独占を支持し続けるならば深刻な結果を招くこと、そしてそれがアフガニスタン国民のみならずソ連自身にも悪影響を及ぼす可能

性があることを強く警告した。

ソコロフ博士は私の見解に理解を示しつつも、「それはモスクワからの指示である」と述べ、残念そうな表情を見せた。彼は、1973年から1974年にかけて私が通信大臣を務めていた時期に面識のあったソ連大使アレクサンドル・プザーノフに直接懸念を伝えるよう助言した。しかし、プザーノフは私との面会を拒否し、PDPA関係者以外との接触を制限する意向を示した。ソコロフ博士を通じて、彼は私に次のような冷酷なメッセージを伝えた——「ハフィズッラー・アミンはアフガニスタンにおいて、ヨシフ・スターリンがソ連にとってそうであったのと同じほど決定的な存在となるだろう。」

私の分析によれば、ソ連によるPDPA支援と、その指導者たちが採用した無謀で過激な戦略が相まって、アフガニスタンは破滅の瀬戸際に追い込まれることが避けられない状況にあった。それは国家の安定を脅かすだけでなく、地域的、さらには世界的な地政学的均衡をも危険にさらすものであった。

第一共和国崩壊の要因

ダーウッド・ハーン大統領のもとでアフガニスタン第一共和国が崩壊に至った背景には、複数の相互に関連する要因が存在した。それらが複合的に作用し、最終的に体制の崩壊を招いたのである。主要な要因のひとつは、彼の専制的な性格であった。ダーウッド・ハーンは国内外の政治環境を誤って判断し、その統治は独裁的な色彩を強めていった。この独裁的な統治スタイルは共和国の安定を著しく損ねる結果となった。彼は国防大臣や首相など、複数の重要閣僚職を自ら兼任し、統治の効率を高めようとしたが、むしろ社会との乖離を深め、国民の支持と信頼を失っていった。安定した社会的基盤を築くことに失敗したことが、最終的に体制の脆弱化を招き、崩壊へとつながった。

さらに、ダーウッド・ハーン大統領は王や王族の他の構成員に対して深い敵意を抱いており、それは復讐心によって駆動されていた。この個人的な怨恨が彼の判断を曇らせ、政権の政治的不安定を一層深める結果となった。

この混乱した状況に拍車をかけたのは、ダーウッド・ハーン自身による裏切りと、彼の権力掌握に大きく貢献した軍将校たちへの不当な扱いであった。これらの将校たちは次第に幻滅し、最終的には彼に反旗を翻し、暴力的なクーデターによって彼を権力の座から引きずり下ろすこととなった。

国際的な側面では、ダーウッド・ハーン大統領の外交政策も急激な転換を遂げた。彼はそ

れまでの東側陣営寄りの姿勢から、西側諸国との関係強化へと方針を変化させた。この方針転換には、エジプトのアンワル・エル＝サダト大統領やイランのレザー・パフラヴィー国王といった国際的指導者の影響が大きかった。しかし、この突然の外交方針の変更は、国内の諸政党や派閥に受け入れられず、彼の指導体制に対する不満をさらに高める要因となった。

さらに、パキスタンとの長引く対立と、「パシュトゥニスタン問題」に費やされた国家資源の浪費が、パキスタン側の反発を招いた。パキスタンはアフガニスタンのイスラーム運動勢力を支援・保護するようになり、それが国内におけるイスラーム運動の台頭を助長し、政権の不安定化を一層深刻化させた。

総じて、これらの要因が複合的に作用し、ダーウード・ハーン政権は一貫した行政運営を維持することができなくなり、アフガニスタン第1共和国の崩壊を早める結果となった。ダーウード・ハーン大統領の統治の終焉は、アフガニスタンに政治的混乱と不安定の時代が到来する幕開けを意味するものであった。